

ガーリブと『^{クトゥーテ・ガーリブ}ガーリブ書簡集』

片岡弘次

1) 名声は『ガーリブ書簡集』から

ガーリブ (1797～1869) は叙情定型詩ガザルの詩人で、ウルドゥー文学の中で重要な位置をしめるだけでなく、その書簡集もウルドゥー散文の発展に大きな貢献をなした。その有名な詩集『^{クトゥーテ・ガーリブ}ガーリブ詩集』の 7 割がたは 30 代までに書きおえて、その後はペルシア語の詩作と、40 代の後半から始まるウルドゥー語での手紙書きが創作活動の中心となった。

ガーリブの鋭い直観力は詩と散文の両方に表れているが、散文の方にそれがより明瞭に見える。ガーリブの得意としたガザルはその詩の性質上、直接的に表現されない。それ故、散文の方にガーリブの思想や考え方がはっきりと見える。「ガーリブの一般的な名声は、ウルドゥー語やペルシア語の詩からでなく、その書簡集からであった」¹⁾とハーリー (1837～1914) は述べている。その理由は手紙を通して人々と接触し、また詩の添削や文学や学問についての議論、社会の見方の記述は多くの人の関心をひいたからだった。

2) ガーリブの手紙

ガーリブは 20 歳の時、アングラからデリーに出て来て、年金訴訟でカルカッタに行った 1827 年から 29 年までの間を除き、晩年に到るまでデリーに住んでいた。デリーでは貴族社会の一員として生活し、またムガル朝皇帝バハドール・シャー II 世の命により、1850 年ムガル朝史を編さんしたり、ゾウク (1789～1854) 亡きあとは、ゾウクに代わり皇帝のガザルの師^{ウスタード}となった。さらに他の人のガザルの添削を行ない、多くの人と接触があった。

現在、確認されているガーリブの書簡数は 873 通で、そのうち宛名が分かっているものは 861 通、残りの 12 通は宛名は分からないがガーリブの手紙とされるものである。特に多いのはミルザー・ハル・ゴパール・トーフタ宛に 123 通、ナ

ワーブ・カラブ・アリー宛が76通、ムンシー・ナビー・バクシー宛の71通である²⁾。

ガーリブにとり、1857年ムガル朝崩壊は精神的に大きな打撃だった。だが崩壊したデリーの中で、ガーリブはもう一度、その書簡により、友人や知己との間に賑やかな世界を作りだそうとした。1858年に出したつぎの手紙からもそれが分かる。「私はこの孤独の中で手紙を書くことによって生きています。手紙が来るとその方がいらっしゃったと考えると、神の恩恵により毎日2、3通の手紙が来ます。朝一度、夕方にもう一度来ることがあり楽しくなります。日中、それらを読み返事を書いて暮らしています。手紙のやり取りだけでは欠点もありますが、自分の思うことはお伝えできます。残念なことは、あなたが今ここにいらっしゃらないことです³⁾」

ガーリブは郵便配達人とも親しくなり、その様子を誇らしげに述べている。「時々驚くのですが、郵便局の誰もが私の家を知っております。配達人も局長も私の知り合いです。友達からの手紙が、町名やただ私の名前だけでも届いてしまいます⁴⁾」また「私は時々、手紙の封筒作りをします。手紙を書かない時は、封筒作りをしているでしょう⁵⁾」とも言った。

3) ガーリブの書簡集の刊行

ガーリブ書簡集の一番初めは、1868年、ガーリブの手紙163通を集録した『アワード・ヒンディー』であった。ガーリブのこの書簡集の発行計画は、M. G. トーフタや M. S. ナラヤンなどにより1850年代の終わり頃から立てられた。しかしガーリブは乗り気でなく、「書簡集の出版は嬉しくない。子供のような反抗はしないが、あなた方がそれを望むなら、こと新ためて聞かないでほしい。その選択権はあなた方にあるから⁶⁾」と言った。また「私が一生懸命、心をこめて書いたものならいい。さもなければ無駄です。また今までの私の名声に傷がつくことにもなります⁷⁾」とも言った。しかし出版することが明らかになると、ガーリブは書くのに注意を払い始め、それ以前と以後のものに違いが出てくる。

最初のものは『アワード・ヒンディー』であったが、その前1861年、自分の詩と共に何通かの手紙を集録して『ガーリブ選』^{インティカーベ・ガーリブ}を出している。それはイギリス人の役人や軍人がウルドゥー語を学ぶために作られたものであった。

2番目は『ウルドゥー・エ・ムアッラー』の書名で、1869年にその第一部として54通を取めて出された。同じ出版社からそれに新たに416通が加えられ、1899

年には、ガーリブの最後のパトロンとなったラームプルの藩王あてのものを含めた『^{マナーティブ・ガーリブ}ガーリブ書簡集』が出た。更に1949年には『ナーディラート・ガーリブ』が出た。その後現在確認されている873通を含む『^{クトラウ・ラティン・ガーリブ}ガーリブ書簡集』が1951年に出た。

4) なぜウルドゥー語で書き始めたか

19世紀半ばまで、ウルドゥー語は学問のある人々の書き言葉として考えられなかった。手紙のやり取りもペルシア語であった。ガーリブもそれに従いペルシア語で手紙を書いていた。しかし1846年の中頃からペルシア語で書くことは少なくなり、ウルドゥー語で書き始めた⁸⁾。ハーリーはそれをつぎのように説明する。「ガーリブは1850年までいつもペルシア語で手紙を書いていた。しかしムガル朝史、『ミフル・ニーム・ロウズ』を書くことを命じられると忙しくなった。その結果、ウルドゥー語で書くようになった。ペルシア語でそれを書くことは、想像力を使う以外にも大きな労力の負担であった。そこで手紙はペルシア語で書くかわりに、ウルドゥー語で書き始めた」⁹⁾

しかしS. M. イクラームやG. R. ミフルなどは違う見方をしている¹⁰⁾。ガーリブの書き方は自由奔放で、また当時執筆していたムガル朝史は大著でなく、時間もそれ程多く取られていたと考えられず、負担の過重は考えられないとの考えを示している。

5) 手紙に述べられていること

ガーリブの手紙の内容はバラエティーに富み、ガーリブの誕生から晩年に至るまでのことがこれらの手紙から推測できる。子供時代の様子、教育、結婚とその影響、交友、経済的な様子、困窮、カルカッタまで行かなければならなかった理由、年金、監獄に入ったこと、インド大反乱での様子などすべてに光が当てられている。しかしそれらは単なる詳細を述べるのでなく、その時のガーリブの精神的状況の説明もある。

これらの手紙の中にはまた当時の社会的、経済的状況の説明もある。19世紀、デリーにおいて人々はいかなる生活を送っていたか、当時の礼儀作法はどうだったか、階級間の相違とその関係、それらの人々の人生観、金持ちや教養人の生活、宮廷の様子、ムガル朝の衰退とイギリス勢力の台頭、政治的变化が社会や経済に及ぼす影響、学問や文学の動き、これらすべてについてガーリブは述べている。

6) ガーリブの手紙の書き方

ガーリブの書き方についてハーリーは「ガーリブの手紙の書き方は変わっていた。ガーリブ以前、誰もガーリブのような書き方はしなかった。またその後も、誰もまねができなかった」¹¹⁾と述べている。当時、手紙はペルシア語で書かれ、その手本として『バイダルハクアブ・ナシ・バイダクの手紙』などが使われ変化の起る期待は持てなかった。しかしガーリブは独自の方法を取った。

その一つが宛名の書き方である。「ガーリブは古い人達が始めた礼儀を重んじて使った古めかしい形式的な宛名の使用を止めた。それは本当に無駄で余分なことであった」¹²⁾

とハーリーは述べている。ガーリブはその手紙の始まりを、息子よ、兄弟よ、愛する人よ、などのような言葉で書き出した。それは当時の習慣とは明らかに違うものであった。しかしいかなる場合でもそうしたのではなく、出来るだけその長い言い回しを止めようとした。ガーリブが宛名に重要性を与えなかったのは、ガーリブは手紙を書くことを会って話をして延長と考えたからであった。

文体は会話調である。当時の社会ではそれは好まれなかった¹³⁾。だがガーリブは、その健康で知的な性格により、自分の手紙に話し言葉を使った。例えばユースフ・ミルザーにあてた手紙では「どなたかいらっしゃいませんか。ちょっとミルザーさんをお呼びして下さい。だんなさま、参りました。あなたにお手紙の返事を書かさせていただきましたが、一つあなたのご質問の返事を残してしまいました」¹⁴⁾と始まる。

ガーリブは手紙の中で、会話調にするために、時々、手紙をドラマ仕立てで書いている。つぎの例はM. M. マジュルーに宛てて書いたものである。その中でガーリブは自分とミランとの間にあった様子を話している。そして手紙を書くのが遅くなったことをわびている。「ミランさん、今日は、やあ今日は、すみませんが、ミール・マフディーさんに返事を書かせて下さい。どうぞどうぞ、文句など言いませんから、あの方はご丈夫になったとお伝えいたしました、熱は下りました。私は自分の手紙であなたに代わってお祈りしています。いいえ、ミランさん、彼の手紙が来てからだいぶ日がたちました。彼は怒っているでしょう、今、書かなければなりません。あなたにどうして怒りましょう。ねえ君、あなたが私に手紙を書くのになぜぐずぐずしているのか言って下さい。あなたは手紙を書かれない、そしてあなたは私におそいと言う。わかった、私がミールさんに手紙を書くのを

あなたはなぜ望まないのか言って下さい。何を言おうか、つまり、あなたの手紙が行く、そしてそれが読まれる、すると私は聞く、手紙を取りあげる。私は木曜日に出発します。私が行って三日したらまた思う存分、手紙を書いて下さい」¹⁵⁾ ガーリブの手紙はこのようにドラマ性に満ちている。

7) ガーリブの性格

ガーリブの性格にはユーモアと瑞瑞しさが混在しており、それが話題をおもしろくした。ガーリブは何でもユーモア抜きでは語らない。ハーリーは「ガーリブの中にはユーモアが漲っており、シタールの弦がメロディーで満ちているように、ユーモアで漲っていた。詩や滑稽な話になくはならない想像力が、飛ぶ力が鳥にあるように、彼の中にあつた」¹⁶⁾ とガーリブの性格について述べている。

断食月の時のことをつぎのように書いている。「日差しが強いです。断食をしています。しかし断食を楽しんでいます。時々水を飲みます。フッカーも吸います。時々ローティーの切れはしも食べます。この人々は不思議な理解をしています。私は断食を楽しんでいます。人々はおまえは断食をしていないと言います。人々は断食をしないことと、断食を楽しむことは別ものだとして理解しておりません」¹⁷⁾ と屈託がない。

M. H. A. ベーグに彼の妻の死に対しつぎのような追悼の手紙を書いた。「恋する男はマジュヌーンの仲間だ。ライラーは彼の前で死んだ。あなたの恋人はあなたの前で死んだ。あなたは彼よりもよい。ライラーは自分の家で死んだ。あなたの恋人はあなたの家で死んだ。ムガルの若者はたいしたものだ。彼のために死ぬ人がいるのだから。私もムガルの男子だ。この人生の中で、私もひとりの娘を死なせた。神はわれら二人を許す。われわれ二人は恋人の死の痛みを持っている」¹⁸⁾

このように他の人の妻の死という適切でデリケートなテーマを扱う場合でも、ガーリブの仕方は独特なおもしろみがある。

ガーリブは人生を真近に見ながら、そこから思考を飛躍させ、手紙の中に詩的様相さえ生じさせた。つぎの例はその一つで、自分の人生に光を当てている。「いいか、世界は二つある。一つは精神的なもの、もう一つは水や花のものである。これら両方の主とは、つぎのことを言うものである。今日、世界は誰のためなのか、そして自ら答える、全能の神のためである。一般的な法則とは、この水と花の世界の犯罪者は精神の世界で罰せられる。しかし時々、精神の世界で罪を犯した者はこの世界へ送られて来る。したがってヘジラ暦 1212 年のラジャブ月 8 日、

この世に私は送られて来た。13年間、監禁された。ヘジラ暦25年ラジブ月7日、婚約し私の足に枷がはめられた。デリーが監獄となりその監獄に私は入れられた。文を書いたり詩を作ることが私に課せられた。何年かして監獄から逃げた。東部の地区で3年を過ごし、結局カルカッタで逮捕され、再び同じ監獄に入れられた。この囚人が足が速いのが分かると、さらに二つの枷がはめられた。足には枷がはめられ、手は傷を負った。課せられた仕事はきつく、力はなくなった。私は恥しらずの者である。昨年、獄中に枷を残したまま、手枷のまま逃げた。私はメーラット、ムラーダーバードを経て、ラームプルに着いた。およそ2ヶ月、そこにいた。それから再びつかまったが逃亡する力はなかった。いつ釈放されるか見ていたい。私はヘジラ暦1272年、ズルヒッジャ月を希望している。釈放後、自分の家に行く。その後、私も精神の世界へ行く」¹⁹⁾

8) ガーリブの書簡とウルドゥー散文

ガーリブはウルドゥー語で一番はじめに個人的な手紙を書き、その後サル・サイヤッド(1817～1898)、スルール(1786～1867)などのような人が続いた。しかし彼らは自分の個性や人格の輝きを手紙という鏡の中に入れなかった。一方ガーリブは鏡の前に立った。そして包み隠さず自分をさらけ出した。すなわちつぎのように言える。1) これら手紙の鏡の前に、ガーリブの人格がはっきり写し出され、それを詳細に見ることができる。2) これらの手紙はウルドゥー語でいろいろな述べ方をとり、魅力的なものとなっている。3) これらの中にガーリブの生涯について多くの資料が得られる。4) これらの中には、ガーリブのウルドゥー語やペルシア語の詩集、あるいはペルシア語の散文で述べられていない多くの考えがある²⁰⁾。

ガーリブの時代、ウルドゥー語で書く散文は一般的でなく普通、書き言葉はペルシア語で、ペルシア散文の模倣が一般的であった。19世紀初頭、フォート・ウィリアム・カレッジでさまざまな文学作品がウルドゥー語訳されたがその影響はまだ限定されていた。

ガーリブの書簡集はウルドゥー散文によい手本を示した。それは簡潔で、明快であったが、またその中にはペルシア語の影響も見え、それがかえってガーリブのウルドゥー散文を流麗なものにした。

ウルドゥー文学において過去100年間において一番多くリプリントされているものの中に、ガーリブの書簡集『アワード・ヒンディー』も入っている。その理由

は、ウルドゥー文学においてガーリブの書簡集は今も人気があり、また学校やカレッジでの教科の一つにされているからである。それ故、毎年再版が出ている。

-
- 1) K. H. QADIRI, "HALI'S YADGAR-E-GHALIB" Idarah-i Adabiyat-i Delli, Delhi, 1990, P. 215.
 - 2) Khaliq Anjam, "Khuṭūṭ-e-Ghālib vol.1" Anjman Taraqqi Urdū Pākistān, Karāchī, 1989, PP. 93 ~ 97
 - 3) Khāliq Anjam, "Khuṭūṭ-e-Ghālib" Anjman Taraqqi Urdū, Pākistān, Karāchī, 1989, P. 307
 - 4) Prof. Muhammad Ḥayāt Khan, "Aḥwal-o-Naqd Ghālib" Lahōr, 1967, P. 488.
 - 5) 4) と同じ, P. 488
 - 6) Khaliq Anjam, "Khuṭūṭ-e-Ghālib vol. 3" Anjman Taraqqi Urdū Pākistān, Karāchī, 1989, P. 1062.
 - 7) 6) と同じ, P. 1062
 - 8) 'Ibādat Barelvī, "Ghālib aur Mutāla'ah-e-Ghālib" Saksenah Publishing' House, Dilly, 1970, P. 381.
 - 9) Hālī, "Yādgal-e-Ghālib", Maktabah Jāmia, Delhi, 1987, P. 197.
 - 10) 8) と同じ. pp. 380 ~ 381.
 - 11) 9) と同じ. p. 199.
 - 12) 9) と同じ. p. 199.
 - 13) 4) と同じ. pp. 492 ~ 493.
 - 14) Khaliq Anjam, "Khuṭūṭ-e-Ghālib vol. 2." Anjman Taraqqi Urdū Pākistān, Karāchī, 1989, P. 767.
 - 15) 14) と同じ. P. 525.
 - 16) 9) と同じ. PP. 201 ~ 202
 - 17) 1) と同じ. PP218 ~ 219
 - 18) 14) と同じ. P. 723.
 - 19) 1) と同じ. P. 221.
 - 20) 4) と同じ. P. 507.

〈キーワード〉 文学, ガーリブ論, 『ガーリブ書簡集』

(大東文化大学教授)